

『東方』二七六号より

八〇歳まで研究者として現役で いたいと願った喜田昭治郎

山根 幸夫（東洋文庫）

本書の主人公喜田は一九四七年、福岡県飯塚で生れた。中国史の研究を目ざして、宮崎大学教育学部に入ったが、途中で方向転換し、四年の苦闘の末、東大教養学部大学院（国際関係論）に入学した。彼が宮崎大学の先輩和田正広（現九州国際大学教授）の紹介状をもって、東洋文庫の私の研究室を来訪、それ以来、喜田と私との親しい交友関係はつづいた。

本書の著者喜田久美子は彼の最愛の妻で、すぐれたエッセイストである。彼が大学院を目ざして勉学中、町の中国語学校で久美子と知りあった。彼女は中国語学生訪中団に参加して、中国旅行することになったが、その資金をカンパする運動に喜田が関わり、二人の親しい関係が生れたらしい。

その翌七四年、喜田は念願の東大大学院に合格、勇躍上京した。久美子も宮崎大学（国語科）を卒業、宮崎日々新聞社に就職した。二人は東京と宮崎に分れて住みながら相互の愛情を暖めあった。彼は本当に誠実な、善良な人柄であった。久美子には会ったことはないが、本書を通じてうける印象は、明朗で、どんな苦難にも耐えぬく強さをもった女性だったようである。喜田がこのような伴侶を選んだことは、彼の短い生涯にとって本当に幸いであった。

当時、駒場の国際関係論には、衛藤ゼミとFゼミとがあった。衛藤ゼミの院生たちは、彼の持ち前の政治力に

喜田久美子著

『風の軌跡——宮崎・東京・上海・福岡』
四六判・二二六頁・文芸社・一、一〇〇円



よって、次々と研究者としてのポストを獲得していった。他方、Fゼミの方は一向に振わなかった。しかし、喜田は自分さえ真面目に研究していれば、必ずチャンスの与えられることを確信し、孜々として研究に励んでいた。

法学部でなく、教育学部から来た喜田にはハンディも多かったと思う。真面目な喜田はそのハンディを克服、中国の対外政策に関する研究をつみあげていった。最初に発表したペーパーは「中国の対外政策の論理構造」（『龍溪』四六〇四八、一九七九）であった。これも本当は学術誌に発表すべきであったかも知れないが、彼に助言する人がなかったらしい。

この年五月三日、六年間暖めてきた愛情を実現すべく、二人は宮崎で結婚式をあげた。喜田三二歳、久美子二六歳であった。本書は語る「式の翌日の夕方、私達は日向港か

- ▼ 『東方』276号より
一 八〇歳まで研究者として現役でいたいと願った喜田昭治郎
▲ 山根 幸夫

らカーフェリーで関東に向う。翌五日、東京着。その夜は彼の住むアパートの大家さん夫妻と仲間が祝賀会を開いてくれた。……その翌日は、彼の部屋の掃除。僅か四畳半一間に小さな流し台という狭さだった。……翌七日、電車で軽井沢に向かう。二泊三日の新婚旅行である。したたるような若葉に包まれて、私たちはサイクリングに戯れた。しかし、二人は忽ち現実に取り戻され、別居結婚が始まった。本書は語る「就職以来続けていた彼への送金も、結婚してからはそれまでの三倍、給料の半分を送ることにした。籍を一つにした安らぎとわずかなりとも経済的な潤いは、彼にとつても勉学への意欲を新たに駆り立てるものとは私は信じていた」。しかし「内面では、夫という立場になったが故に歯ぎしりを強いられていたようである」と。

別居結婚に問題が起った。喜田はひどい風邪にかかり、食事を作るどころか、薬をもらいに病院へも行けぬ状態が、一週間以上もつづいた。久美子も別居の限界を感じて、八〇年七月、新聞社を退職して上京した。二人の新居は葛飾区堀切の二軒長屋で、六畳に三畳、台所、トイレ、陽もほとんどささず、風呂もないという家だった。本当にきびしい生活であった。喜田にとつて最大の苦悩は、いつになったら研究職に就けるかという問題であった。「就職のことを思うと、暗然たる気持になる」と喜田は語っている。喜田の気持はあせるばかりであった。衛藤ゼミの連中は、次々に研究職に就いていくのに、自分ばかり残されているとの焦燥感に駆られていた。八一年三月、喜田は大学院博士課程を満期退学した。

いくら待っても娘婿の就職がきまらないのにいらだつて、久美子の両親はF教授の処へ就職依頼に赴くと上京してきた。教授も「近々何とかしましょう。喜田君達を残し

▶ トップページにもどる

て私の安泰はない」と答えたとのことで、両親も安心して帰っていった。「私の力で何とかするとの言葉を信じ、最後まで残ったたった一人の弟子の喜田は、師の保身に大きなショックを受けた」。F教授は自ら再就職したのである。以後、喜田は公募のあるたびに応募することにしたが、希望は報いらなかった。

一九八二年五月、喜田は『現代中国外交研究文献目録一九四九―一九八〇』を龍溪書舎より刊行した。本書の刊行については私も相談をうけ、二、三の出版社に当たってみたが、結局引き受ける処はなく、彼自ら龍溪に依頼したものであった。この目録はよく行き届いた、緻密な目録であった。以後、多くの研究者によって利用されたに違いない。彼は東洋文庫の私の処へも一冊持参してくれた。インスタント・コーヒーを入れて、彼の鬱屈した気持を慰めながら、好い研究成果を挙げれば、きつと報えられる日が来るからと、気持を静めさせるしかなかった。

八三年正月、例年の如く学生アパートの仲間を集めて祝ったが、突然喜田は「今年も就職できなかったら東京を離れるよ。勉強をやめて、妻の実家で雇ってもらう」と宣言した。久美子にとつても思いがけぬ発言であった。それほど喜田は追いつめられていた。それを救ったのは、長男紳一郎の誕生であった。久美子は「天使の到来」と述べている。八四年三月、同じ区内の白鳥へ引っ越した。今度は日当りもよく、風呂もあったが、家賃は倍になった。久美子が出産で退職したので、喜田は学習塾の専任講師として毎日出かけるようになった。八五年一月には次男惇郎が生まれた。喜田の精神的負担は益々重くなった。八六年四月から彼は三菱総合研究所国際部中国室の嘱託となり、研究にも関わることで、幾らか気持の安定を得ることができた

らしい。

同年一月、外務省の委託研究を、アジア政経学会から助成を得て、『現代中国外交研究序説——「条約」の分析』と題して刊行した。この出版がきっかけで、翌八七年、喜田は上海総領事館専門調査員として、上海へ派遣されることになった。第三子の出産を控えた妻と子供達を残して、七月下旬に喜田は単身上海へ赴任した。久美子は語る「東京での生活と比較すると、『天と地』だと繰り返す夫の明るい便りに、私もようやくの光を見た。中国の政治を研究する夫に、現地で生の姿に触れながら勉強を続けられるという、この上ない環境と生活が与えられたのだ」。八月二四日、三男文造誕生。一二月半ば、久美子は三子と共に上海に赴いた。

上海では外交団専用アパートを提供された。一五畳と一二畳くらいの洋間をもつ部屋で、運転手とお手伝いも雇い、久美子は館員夫人たちと行動を共にすることも多かった。喜田は自分の研究を主としたが、週一回の館内会議で『閑話休題』と号した資料集を出し続けた。目にした新聞・雑誌等から公館に有益と思える資料を収集したもので、滞在した二年余りで一〇〇号を数えた。後に再会した上司から「あれほどの仕事は、かつての専門調査員にはなかった」と評されたという。如何にも喜田らしい活躍ぶりである。

上海に在任中、喜田は九州国際大学に勤めていた宮崎大学の先輩和田正広から、今度新学部ができるから来ないかと勧められた。私は和田から事前にこの事を聞いて本当に嬉しく思った。その後、東京である友人から、喜田君はまだ職がきまっていなかったら、新しいポストがあるんだが……といわれた。喜田にも漸く運が向いてきた。本当に長

トップページにもどる

い間、苦勞に耐えてきた甲斐があったというものである。

一九九〇年四月、九州国際大学に就職した喜田は、猛烈な勉強を始めた。久美子によれば「朝食ののち八時前には研究室へ向かい夕方六時半すぎに帰宅という日課は、月曜から土曜まで授業の有無にかかわらずなかったが、そのうち夫は日曜日にも研究室へ出向くようになる。……』とに角僕に勉強させてくれ』『この十年間が勝負なのだ』と夫は言った。職のない辛苦からようやく脱した夫は、心の安定を得て、勉強に憑かれていくようにも見えた」という。

九〇年一〇月には、四人目の子、めぐみが生れた。喜田は「めぐみ、めぐみ」といつて、こよなく愛した。喜田は家にいる間は妻や子供たちに細かい心配りを示した。本当に家族思いの父親ぶりであった。「学校や幼稚園のできごと、勉強の質問、抱く夢を、子供達は先を争って語り、夫は子供の頃の体験を話して聞かせ、風呂場談議はいつの日も尽きなかった。……子供達が父親に寄せる信頼と子供に向ける夫の愛が、しみじみと伝わってくる。家族つていいな」と、私は幸せを実感していた」と久美子は記す。

一九九二年六月、喜田は『毛沢東の外交——中国と第三世界』（法律文化社）を刊行した。第二次大戦後、国際間の政治勢力は米国を頂点とする資本主義国と、その対極にソ連を中心とする社会主義国が設定された。中国共産党は一九六〇年代初頭の中ソ論争の中で、社会主義国が第三世界の民族運動に対してどのような対応をとるかは、プロレタリア国際主義の原則に関わる問題だと述べ、ソ連を激しく批判した。中ソ論争をふまえて、いかなる新たな第三世界外交を展開するのか、それが喜田のその後の一貫したテーマになった。党の情勢認識と政府の外交活動の整合・不整合性を分析した本書は、長年の研究テーマの一つの到

達点であり、中国と第三世界に対する本格的な研究書であり、喜田が学界に残した、最後の著作であった。

一九九三年正月を迎えた喜田家は、夫妻と四人の子供で幸せがあふれていた。久美子が六〇歳までは元気にいたいという。「僕は八〇歳まで現役で仕事するよ」というのが、喜田の口癖になっていた。しかし、学内では不愉快なこともあった。教員公募が、公募ではなく、実は内密に進められていたことに、喜田はひどく憤慨した。次に、喜田自身の昇格人事が、審査委員会では通過していながら、教授会で否決されてしまった。喜田の正論に対する報復人事であった。喜田は一旦は断っていた久留米大学からの招聘を考え直すことにした。七月の初め、彼の再度の教授昇格人事が上提されたが、前日久留米大学から喜田の割愛願が来たという理由で、議長は喜田の昇格人事を議題からおろしてしまった。喜田にとっては不愉快きわまる措置であった。

七月になって、喜田は中国へ出かける予定であった。腹部に急にはげしい痛みを感じ、開業医を訪ねると、初期の膵臓炎という診断だった。しかし、痛みが腰や首にまで広がったので、大学病院へ赴いて診断をうけた。再診で膵臓炎との診断のもとに入院したが、一週間後、担当医から呼び出され、病気は悪性で手術も不可能なことを告げられた。膵臓癌だったのである。きびしい痛みがつづいたようである。九月二九日、久美子が自宅に帰っている短い間に、喜田は誰もいない病室で息を引きとった。まだ四六歳であった。八〇歳まで現役の研究者として生きたいと願っていたのに。

* *

以上は、喜田と久美子の苦闘の半生を、エッセイストの

◀ 今月の『東方』

▶ トップページにもどる

◀ 書評目次へ

久美子が、喜田の死後一〇年を迎えて綴った、愛と涙の物語であり、ほほえましい家庭の生活が物語られている。これから研究者として活躍しようと考えていた喜田は、わずか四六歳でこの世を去った。もつと研究したいと願った喜田の思いが、ひしひしと伝わってくる。彼は研究職に就くまで、大学院を満期退学してから一〇年かかった。各大学の公募に応じて、そのたびに提出書類が返送されてきた。展望はいつになっても開けなかった。世間の人は、研究者の卵がこのような苦盃をなめながら、耐えぬいていることはわからないであろう。最近友人から聞いた話だが、東京のある私立大学の公募に対して、一〇〇人以上の応募があり、その中には中国や米国からの研究者も含まれていたという。公募は一人であるから、残った九九人は苦盃をなめなければならぬ。このような辛酸に耐えながら、研究職を求めて苦闘している人たちが大勢いるのである。

この苦闘の中で、喜田が闘いぬくことができたのは、彼をよく理解し、やさしく支えてくれた妻久美子と、彼を絶対的に信頼し、慕いつづける四人の子供たちの存在であった。この妻と四人の子供たちが、彼の頑張りを支えたのであった。「八〇歳まで研究者として現役でいたい」と願った喜田は、わずか四六歳で早逝してしまった。私は喜田が生きておれば、地味ではあっても、堅実な立派な研究を積みあげたに違いないと確信する。

喜田に先だたれ、四人の子供と共に後に残された久美子は、どんなにか悲嘆にくれたことであろう。しかし、彼女はいち早く立ち直って、宮崎に帰り、補習塾を経営しながら遺児たちを立派に育てた。この久美子の健闘ぶりを心から讃えたい。そして、研究職を目ざして頑張っている若い人たちに、ぜひ本書を読んでいただきたい。